

### Y3-04

#### ハイチ地震災害復興支援事業の進捗と課題

大阪赤十字病院 国際医療救援部  
やの さちこ  
 矢野佐知子、池田 載子、弘川 摩子、  
 中出 雅治

【はじめに】2010年1月12日に発災したハイチ大地震の復興支援事業として筆者らは、被害の大きかったレオガンにて、2011年1月から6ヶ月間保健/水と衛生の統合事業に参加した。我々の活動内容を紹介し、問題点について報告する。

【対象と方法】水/衛生チームのアセスメントに基づき、レオガンにおける人口60000人を対象に、安全な水へのアクセスの確保と衛生の知識の普及、モニタリングを行った。同時にコレラの大流行が起こっており、コレラに対する知識と予防法普及のためのワークショップも行った。

【活動内容】水/衛生チームのトイレ建設と、井戸の建設に平行し、保健チームは対象となる地区のリーダー等と相談の上、10-15世帯に1名の割合でボランティアを選出し、衛生に関する知識普及のトレーニングを行っている。受講したボランティアはそれぞれが選出された10-15世帯に対して週1回の講習を3ヶ月行い、地域に普及させる計画である。本抄録提出時点で5箇所の地域に対して1回ずつトレーニングを終了し、モニタリング中である。今後は対照地区にある学校においても衛生教育活動を行う予定である。

【考察】1. 元々最貧国における、首都を直撃した大災害後ということで緊急援助も長引いたが、その後の支援も、被災前の生活水準が低いために、緊急から復興という境目をどこに設定するかが不明瞭であった。また、復興支援というよりも開発援助に近い状態で、ゴールをどこに設定するかが困難であった。2. 大災害後の国際援助機関の協力態勢のとり方が難しく、ともすれば陣取り合戦となってしまう危惧があった。

### Y3-05

#### ERUにおけるカード型データベースソフトを用いた診療データ管理の効率化

清水赤十字病院 消化器内科<sup>1)</sup>、  
 姫路赤十字病院<sup>2)</sup>、  
 成田赤十字病院<sup>3)</sup>、  
 日本赤十字社 国際部<sup>4)</sup>  
ふじま たかのり  
 藤城 貴教<sup>1)</sup>、高原 美貴<sup>2)</sup>、松崎 安容<sup>3)</sup>、  
 佐藤 亜希<sup>4)</sup>

【はじめに】日本赤十字社の基礎保健Emergency Response Unit (BHC-ERU)において、診療患者のデータ管理は主にExcelを使用して行っている。Excelは統計処理ソフトとして優れている反面、データ入力やや煩雑で、受診者毎の診療データの視認性も悪い。今回我々は、2010年11月よりハイチ共和国において展開されたコレラ救援ERUにおいてカード型データベースソフト“FileMaker Pro”を用いて患者データの処理を行い、その利便性を検討した。

【対象と方法】我々ERU第4班は2011年2月11日よりハイチ南県ポルタピモンのコレラ治療ユニット(CTU)の運営を引き継ぎ3月21日までの39日間に176名の新患を診療した。診療データは受診者の年齢、性別、重症度、投薬内容・量、転帰などをリアルタイムにFileMaker Proに入力し診療データ管理を行った。

【結果】Excelに入力する場合と比較した場合の利点は、1.入力画面のレイアウトの設定も入力操作も容易、2.患者ごとの診療データの視認性がよい、3.入力時にワークシートを左右にスクロールする必要がない、4.チェックボタンなどの利用により文字のキーボード入力を最小限にできる、などがある。一方で問題点として、1.データの解析やグラフ化の際にはExcelへデータをエクスポートする必要がある、2.操作方法に慣れた人が少ない、などが挙げられる。

【考察】ERUの診療データは、活動方針の決定のために必要なばかりか、以降のERU活動において必要なデータとなる。そのためより詳しくより多くのデータを効率的に収集する必要がある。この観点からみるとFileMaker Proの利用はERUにおける診療データ管理の効率化に寄与すると考える。